順序で、縱に對比して並べた丈けで、一々の發音を漢文或は滿文で示すことは廢されて居る。さて此の書物は何時出來たものであらうか、乾隆時代の製作であることは前記三體文鑑の序文から考がへても明らかであるが、此の書には序文もなければ凡例もなく、また四庫全書總目などにも見えて居ない、たゞ四庫全書の出來上つたのは乾隆四十七年七月であるからして、此の御製本の出來たのは此の年より後といふこと丈けは爭はれない、全部三十六卷で增訂文鑑と同じく正篇三十二卷、補篇四卷より成つて居る。

以上は最初の清文鑑から、四體清文鑑に至る迄の大體の解題であるが、此等の書物は上記の樣に種々の點に於て相異つて居るのであるが、只一つ各書を通じて一貫して居る箇條がある、それは卽ち集錄してある言葉の類別の仕方であつて、前にも述べた樣に、天文、地輿といふ樣な類に分けたのであるが、第一の天文類から最後の蟲動類に至る迄、各書皆同一である（三體以後には此の中の小別によつて少しく增加しては居るけれども）これは最初の文鑑の體裁を尊重して、最後に至る迄保存したものであらうと思ふ。

三　五體清文鑑

以上述べた各書の解題は、實はまた五體清文鑑の解題の一部であつて、かゝる沿革の後に此の書が更に編纂せられたと云はゞ、書き殘した所は幾何もないのである。此の書も四體と同樣に、序文も凡例も目錄もなく、他の諸書を涉獵して見るけれども、一切その編纂に關することは不明である、ただ書物の性質上乾隆末年の勅撰本なることは、自分が云ふ迄もなく先きの三體の序文を見る人には、一見首肯せられることゝ思ふ、而して四體迄は各々板本